

日本語の教材としての アーネスト・サトウ『会話篇』

兪 三 善

1. はじめに

本稿は、アーネスト・サトウ『会話篇』(1873)を日本語教育の教材という観点から検証したものである。

『会話篇』は、イギリスの外交官・日本学者であるサトウが日本語学習書として1873(明治6)年に横浜で刊行したものであり、幕末明治初期の江戸語・東京語の資料として大変貴重であることは吉田(1952:336)¹⁾や小松(2006:302)²⁾が指摘しているとおりである。とくに、幕末期の日本語の実態を論じる際によく用いられていて³⁾、言語資料としての価値の高さは広く知られるようになった。

ところで、もともと『会話篇』は教材として編纂された書物であるが、なぜか日本語の教材としての価値を検証した研究はほとんど見当たらない。日本語教材の歴史の変遷についての検討も1895年以降の教材からはじまっており(吉岡:2016)、『会話篇』は調査の対象に入っていない。また同書に対する評価も一様ではない。日本語学の立場から考察した研究や『会話篇』の解説および書評などに見られる評価としては、①日本語学習の資料(吉田1952:337)、②語学書(石井1957:84)、③江戸ことばの手引書(小島1972:52)、④江戸語(東京方言)の手引書(金田・宮腰1994:178;飯田2002:177)、⑤英語を母語にする人のための日本語学習書(常盤2003:50)、⑥教科書というよりも江戸口語の表現集(金沢2008:175)、⑦日本語学習書(黒崎2011:11)がある。

そこで本稿では、『会話篇』の教材としての側面を複数の観点から検証し、それに基づいた評価や位置付けを試みる。検証の際はサトウ自身の回想録⁴⁾および日記、またサトウ関連の著作や同時期に日本で活躍していたオールコッ

ク、ブラウン、アストン、チェンバレンなどの日本および日本語に関する記録も踏まえた。

以下、2節で資料と先行研究について述べた後、3節で『会話篇』の編纂をもたらした幕末の日本語学習の環境を概観する。4節では『会話篇』の編纂の理由、利用状況、出版後の反響について記す。5節では第一部での学習目標、6節では第二部を作成した背景など、7節では第三部での学習目標について記述する。8節は総括とする。

2. 『会話篇』の書誌と先行研究

この節では『会話篇』の書誌と先行研究を記す。『会話篇』の構成と内容については本稿の5節以下で詳しく述べるため、ここでは簡略に示す。先行研究の紹介も日本語教育の観点から考察したものを中心にする。

『会話篇』は、イギリスの外交官・日本学者であるサー・アーネスト・メイソン・サトウ (Sir Ernest Mason Satow) が日本人数名の手助けのもと、日本語学習書として、1873 (明治6) 年に刊行したものである。

その構成は、第一部 (Part I) と第二部 (Part II) と第三部 (Part III) の3冊からなる。第一部は、第1章 (Exercise I) から第25章 (Exercise XXV) にいたるローマ字表記による日本語文と英語の対訳が付いた対話集である。第二部は、第一部の第1章から第25章の日本語文中に出てくる語句について説明をした注解集である。第三部は、第一部のローマ字表記による日本語の対話文を、仮名文および漢字仮名交じり文に直したものである。同書にはフランス語に翻訳された仏訳本 (全1冊) もある。

会話は、品物の売買、師匠と弟子、主人と使用人、火事、新年および恵方参りの際の主人と客人、公用私用の旅、訴訟、気候、訪問といった当時の日常生活において交されたものである。

本稿の調査では、第一部と第二部は東洋文庫の『会話篇』、第三部は『春秋雑誌 会話篇』 (『増補 江戸語東京語の研究』所収の全2冊) を用いている。第一部・第二部と第三部とが別の資料となっているのは、東洋文庫のサトウの『会話篇』には第三部の『春秋雑誌 会話篇』が収録されておらず、一方『春秋雑誌 会話篇』には第一部と第二部が収録されていないためである。

本資料に関する先行研究には、書誌に関する研究としては松村 (1998: 351-419) ほかの諸論考がある。日本語学の観点からは小島 (1972)、古田 (1974)、飛田 (1977)、大久保 (1988)、常盤 (2001) などの研究がある。日本語教育の

観点から分析した研究には金沢（2008）と兪（2015）がある。金沢（2008）は『会話篇』とサトウの回想録『一外交官の見た明治維新』などの著作や妻武田兼および息子久吉への日本語書簡などを照合しながら、サトウの日本語学習や研究を検討している。兪（2015）は『会話篇』に出現している言いさし表現をEXERCISE 別の出現状況、形式面、機能面、言いさす内容において分析し、日本語の教材において早い段階での導入であることを指摘している。このように、日本語教育の研究資料としてはあまり注目されていないこともあり、日本語教育および日本語教材史において『会話篇』をどのように位置付けるべきかという研究は始まっていない。そのため、本稿では『会話篇』の教材としての側面を複数の観点から検証し、それに基づいた位置付けを試みることにした。その第一歩として、『会話篇』の編纂をもたらした幕末の日本語学習の環境に着目してみたいと思う。

3. 『会話篇』の編纂をもたらした幕末の日本語学習の環境

安政5（1858）年に幕府がアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスの5カ国それぞれと結んだ安政五カ国条約により、翌1859年7月1日をもって長崎、神奈川、箱館の3港が開港することになる。これに伴って、英米や欧州の外交官・宣教師・商人たちが国交・宣教・貿易を進めるために日本に押し寄せてきた。そのさなか、イギリス政府は1859年3月1日付けで清国駐在領事の経歴を持つサー・ラザフォード・オールコック（Sir Rutherford Alcock）を初代駐日総領事に任命し、同年6月26日に日本に送り込んで高輪の東禅寺に暫定のイギリス総領事館を開く⁵⁾。こうして、イギリス政府から託された領事館の設置という大事なミッションも達成し、いよいよ外交の手腕をふるって両国の関係を発展させて成果をあげたいと意気込むオールコックだったが、思わぬところから伏兵があらわれて立ち往生させられる。オールコックの『大君の都—幕末日本滞在記〔上〕—』（1962:257;以下、『大君の都』と呼ぶ）には、伏兵についての記述がある。

われわれがまったく日本語の知識を欠いていることが、この国とわれわれとの関係を発展せしめて成果をあげるための最初の重大なさまたげとなった。

日本語力の欠如はイギリス公使館の外交に限られた問題でなく、日本在勤・

在住の外国人の交易や日常生活、また宣教師たちの日本での布教活動にもさまざまげとなっていた。この理由は二つあった。

第一に、幕末のころは外国人に日本語を教える教育機関もなければ、専門的な知識を持って日本語を教えられる日本人もいなかったからである。当然のことだが、英語や欧州のことばで日本語を教授できる日本人の教師もいなかった。同じくオールコックの『大君の都〔上〕』(257-258)には、そうした状況が垣間見える記述がある。

通訳として使節に配属されている日本の官吏（オランダ語の文法を生かじりしてただけだった）の助けを借りて、わたしは時機を失することなく学びはじめた。（中略）午前中われわれはテーブルを囲み、われわれの不幸な教師をまん中にして（うしろにはひとりの役人とひとりの目付とが、われわれが国にたいして反逆を企てないように見張っていた）、英語の八品詞に相当するものについて十字砲火を浴びせるように質問し、とまどわせ、ひどく困らせたものだ。このマタベという男は、物静かな忍耐強い人物であった。かれは、ときどき頭を一方の側にかしげ、指で静かに始終剃った頭のとっぺんをなでて、その下の知恵をしばり出してはたずねられた問いに答えようと空しく努力したもので、その顔付きときたら、まさに困惑と悲惨そのものであった。一八カ月のあいだ、くる日もくる日もくり返されたこの長い拷問の最後の結果としてできあがった事実と憶測のいりまじったその文法を、普通の読者は読むことはあるまい。

授業風景というより、まるで容疑者を取り調べる刑事ドラマのワンシーンをみているかのようなのであるが、苦心しながら日本語習得に精進する外国人の奮闘ぶりを知ることができる大変貴重な記録である。それと同時に、18カ月もの間、質問攻めにあいながらも彼らと向き合いつづけた善良な日本人がいたことを知る重要な記録である。この記録が示すとおり、力を借りた日本人からは日本語の知識はほとんど得られず、疑問に対する十分な説明も受けることができなかった。その結果、「事実と憶測のいりまじったその文法」と表現されるように学習は混迷を極めていた。このオールコックの証言はサトウが来日する前のことであるが、彼が来日してからも依然「教師」といっても「教える」ことのできる人をさすのではなかった。

第二に、国内外を問わず日本語学習に適切な参考書、とくに口語を学べる学習書も備わっていなかったからである。まず、国外の状況は、W.G. アストン

の『日本文学史』（1899：原本序一）の記述から知ることができる。

今より四十年前には、我英國人の如きは、日本の書物と云へば、只の一頁
 だも讀むこと能はざりしは勿論、大陸の學者にして、日本語に通ぜる人す
 ら、十分、我等に説明すること能はざりき。

ちなみに、このころヨーロッパでは、オランダ人のホフマン、フランス人の
 レオン・ド・ロニーなどの日本学者があらわれ、日本語の辞書づくりに取り掛
 かっていた。だが、まだ教材開発の途中にあつて、アストンをはじめ、日本語
 学習や学習者の疑問に十分に答えられるものではなかったようである。英語で
 書かれた日本語の学習書がないことにアストンは戸惑っている。そして、サト
 ウも回想録『一外交官の見た明治維新〔上〕』（1960：65；以下、『回想録』と
 呼ぶ）において当時の国内外の日本語学習の環境について、このように述べて
 いる。

当時は、日本語を学習する手引きがほとんどなかった。J・リッジンス師
 の書いた、長崎の方言のわずかな語句しかない薄いパンフレットや、ウィ
 リアム・メダースト（兄の方）の編纂で何年も前にバタヴィアで刊行され
 た単語集、ランドレス編のロドリゲス日本文典、オランダ語で書かれたド
 ンケル・クルチゥスとホフマン共著の文法、レオン・パジェスによる同著
 のフランス語訳、同氏による一六〇三年の日葡辞典の一部訳、ホフマンの
 日蘭英会話書、ロニーの日本語入門など、そんなものがあるに過ぎなかつ
 た。しかも、これらの書物はほとんど日本では手に入らなかった。私はロ
 ンドンを立つとき、日本語に関する書物は何も持って来なかった。

不十分ながらも幾つかの参考資料は存在したが、それらもオランダ語やフラ
 ンス語によるもので、英語母語話者にはハードルが高いものであった。しかも、
 国外の初歩的な本でも肝心の日本では手に入らなかったのである。

やや話が横道に反れるが、幕末のころは英語の時代ではなく、オランダ語が
 諸外国と日本との外交・交易の公用語で、通話の際は口頭、文章のいずれも常
 にオランダ語を媒介としていた時代であった。これは英語を知っている日本人
 がまだほとんどおらず、日本語を話せる外国人も片手の指で数えるほどしか
 いなかったからである⁶⁾。『回想録〔上〕』（195）にはオランダ語で行われていた
 ハリー・パークス公使と日本の閣老との会見の様子が次のように記されている。

日本の閣老と会見する場合には、オランダ語通訳が公使の言ったことをオランダ語に訳し、それを日本人のオランダ語通訳が日本語に訳すのが習わしとなっていた。返事をする場合も同じ方法で、二人の人間を通じてやらなければならないかった。

このようなオランダ語を迂回しての接触だったので会談の進行は遅く、いろいろな誤訳のもとにもなっていた。その上、通訳の質もさることながら通訳への支払いもサトウより高額だったこともあり、「日本語を読み、書き、話すことを覚えて、これらの仲介者にとって変わろうというのが、私の野望であったことは言うまでもない」（『回想録〔上〕』68）とサトウは不満を漏らし、のちに公言したとおりの英語通訳の時代をもたらす。蛇足であるが、記述中の「二人の通訳官」ではなく「二人の人間」というサトウのやや乱暴な言葉遣いは、通訳の質や謝礼もさることながら、通訳生を教育・監督する立場にある日本語書記官がオランダ語の専門家であり、上司にあたる通訳官もオランダ語畑の出身であって、かれらから日本語の学習についての指導は何も期待できないという不満からである。ちなみに、イギリス公使館員の教育係はサトウが通訳生の教育係（日本語書記官）になるまで、オランダ語の専門家であった。

以上のオールコックやアストンやサトウの証言から、幕末のころは日本語の学習に関するかぎり、何事も独力と手さぐりで進んでいくしかなかったということが浮き彫りになった。このようなゼロからの出発だったため、オールコックもアストンも日本語についての著作を世に出し、サトウも後進の指導に当たるために『会話篇』を編纂するにいたる。前者二人の著作については別稿を用意することにし、ここからは、サトウが如何にして『会話篇』を作り、また日本語の学習に役に立てたか、ということに論を進めたいと思う。

4. 『会話篇』の編纂の理由、利用状況、出版後の反響

『会話篇』を編纂した理由については、著者自身が同僚のミットフォードの「役に立てようと思って、一連の文章と対話を編纂しはじめたが、これは数年後に会話篇という標題で出版された」（『回想録〔上〕』249）と述べているのに口をはさむ余地がないが、一方では、この著者の控えめな証言が『会話篇』がプライベートな教材であるかのような印象を読者に与えて、同書に対する評価を落としているように筆者には思われて仕方がない。ほんとうにミットフォードだけのために『会話篇』を編纂したのであろうか。この答えを得るために、サト

ウの日本語力と職歴を踏まえながら編纂の理由、利用状況、出版後の反響に注目して検証してみる⁷⁾。

4-1. サトウの日本語力と職歴

サトウは8カ月ほどの中国での滞在を経て、1862年9月に通訳の研修生として横浜にやってきた。ロンドン大学を卒業した18歳の青年であった⁸⁾。来日したころの日本語力は短期の中国での漢字や中国語の学習経験が功を奏し、「ほんのわずかながらも漢字を知っていたし、また運よくメダーストの支英辞典を持っていたので、日本語は書いてもらいさえすれば、どうにかその意味を理解することができる」状態だった(『回想録〔上〕』65)。

当時、イギリス公使館がサトウに提供した日本語の学習環境は、週に2回ほど日本語が話せる数少ない外国人の一人である宣教師ブラウンから日本語の手ほどきを受ける程度のものであった。公使館では上述したとおり、教育係の日本語書記官や先輩格である通訳官からの指導は期待できず、さらに教授の素養を持った教師もなく適切なテキストもなかったために、サトウも日本語の習得に骨折りを強いられていた。サトウは「通訳生の任務は何よりも先にその国の言葉を覚えるにあり」(同上、p.65)という考えで猛勉強のすえ、来日2年目に、帰任したオールコック公使から「サトウはイギリスから派遣された一介の若者でしかないが、難解な日本の書を読み英語に翻訳できるまでに日本語を習得した」という評価を受けるまでとなった(B.M.アレン『アーネスト・サトウ伝』1999:45)。翌1865年4月には通訳の研修生から横浜の領事館付通訳官に昇進する。この時点で、サトウは「オランダ人の通訳者では手のつけようのない秘密の政治文書をも、読んだり、英訳したりすることができたのである」(『回想録〔上〕』195)。翌1866年2月からは翻訳も兼務するようになる。さらに同年末には上司パークス公使の補佐の一人として起用され、横浜の領事館から江戸の公使館へ転任して通訳官兼翻訳官となった⁹⁾。これからのサトウの目指すところは通訳生の教育・監督を兼務する日本語書記官の座のみである。それも目前に迫っている一方、いままで機能しなかったイギリス公使館の教育制度が大改革を迎えることになる。

4-2. 『会話篇』の編纂はミットフォードばかりでなく後進の教育のため

さて、イギリス公使館で押しも押されもせぬ日本語の実力と業務能力を兼ね備えたサトウの前に1866年10月に本国の外務省から一人の二等書記官が派遣されてくる。この人物こそ、『会話篇』を編纂するきっかけをつくったとされ

るミットフォードである¹⁰⁾。名門出身でオックスフォード大学を卒業したエリート外交官である。このミットフォードもサトウと同様に絶えず日本語の勉強に没頭した甲斐あってか、来日して一年ほどしか経っていないにもかかわらず、大阪のある役宅へ出向いた際には、「だれの助けもかりずに日本語で会話をやってのけることができた。それは、同君が語学力を有していた著しい証拠である」と評された（『回想録〔下〕』84）。ミットフォードはさらなる会話能力を身につけるべく、サトウに助けを求める。彼の求めに応じたサトウは一連の文章と対話を書き、これを『会話篇』と名付けて印刷させた¹¹⁾。これが『会話篇』出版の由来である。

しかし、パークス公使宛のサトウの直筆の報告書¹²⁾をみると、『会話篇』はミットフォードばかりでなく、クイン、ホッジス、ドリスコール、ホールの日本語学習のために作成されていたことが判明する。引用する報告書は筆者(兪)による日本語の訳文である。

私は1867年11月1日に閣下に覚書を提出し、閣下の承諾をいただきましたが、そのなかで英国から着任する予定だった通訳見習いのための学習計画を提案しました。同月にクイン氏とホッジス氏が来日し、翌年3月にはドリスコール氏とホール氏が来日しました。私は覚書に示した学習計画にもとづき、さっそく事前に作成していた日本語の口語体の練習問題を彼らにわたすとともに、日本人書家を雇って日本人が使う書体を教えてもらいました。

しかも教材づくりは教育係となることを想定してすでに始まっていたのである。それを裏付けるかのように、会話の教材づくりの最中の1867年の11月に通訳の研修生クイン氏とホッジス氏が着任し、その教材でサトウの方針どおりの日本語の勉強が始まる。一方、サトウも1868年に1月1日付けで日本語書記官の地位になり、年俸が700ポンドとなる。この年俸のうちの100ポンドは後進指導への報酬である（『遠い崖〔14〕』332）。教育係の職務が加わり、通訳の研修生の日本語の教育と昇進（日本語能力）試験の審査、また彼らの管理・監督をする立場になった。当代きっての日本語専門の教育係が誕生したのである。同年の3月にイギリス公使館にドリスコールとホールという研修生がまた着任してくる。4人の研修生たちの赴任を受けて、第20章の「漢字の学習」を追加する。1868年には後の『会話篇』となるテキストの全体の5分の4をまとめるまでにいたる。ミットフォードもこれを利用して日本語の会話を学ん

だ。1871年にも本国からガビンス、ウーリー、ポールという通訳の研修生たちが公使館に来ていて、かれらも原稿のままの教材を利用して会話の勉強をした。

4-3. 『会話篇』は広く民間の外国人にも使用されていた

そして、日本語を学習したいと希望する人がいれば、いつでもこの原稿を貸してあげたと同書の序文にも述べられているように、日本在勤・在住の外国人の手にも渡っていた。1873年に原稿のままの会話書の使用の不便さを改めるとともに、それまでの原稿の整理と旅行などの内容を盛り込んだ5章を新たに加えて全25章の原稿を『会話篇』と名付けて出版に踏み切る。刊行と時期を同じくして「THE JAPAN WEEKLY MAIL」(1873年10月18日号: Reprint Part1に所収)に同書の「REVIEW」があげられたことで、当時の外国人に広く知れ渡るところとなった。引用する書評は筆者(兪)による日本語の訳文である。

『会話篇』は三部から成る。第一部にはローマ字表記で日本語の文章と会話を示され、見開きのもう一方のページにその英訳が載っている。学習が進むにつれて文章は徐々に難しくなるが、平均的な学習者にはもっと高度な内容でもよかったかもしれない。この種の本は読みものとしては退屈なのが普通で、なんとか読者の関心を引こうと知恵を絞りたくなる筆者もいる。(中略)サトウ氏の会話文は、そんなことをしなくても面白い。多くの場合、まず日本人の学者による文例が示され、日本人の生活習慣が生き生きと描きだされる。日本語に関心がない者でも、火事、旅行、新年に関する会話や、契約違反をめぐる外国領事と日本人役人の応答は興味深く読めるのではないか。これらの会話文は正しく、かつ十分にこなれた英語に翻訳されているため、とても理解しやすい。逐語訳の英語はあらためて第二部の説明中のふさわしい場所におかれている。まず日本語の文を示し、それから英語を示すという方法をとった結果、学習者にはとてもありがたい構成になっている。英語から日本語に翻訳すると、硬質でこなれない表現になりがちで、しかも日々使われている日本語表現には対応する英語がないものも多いため、無視されることになる。(中略)サトウ氏の本のもっとも価値ある部分は第2部だろう。初心者に必要なと思われるすべての説明があるだけでなく、江戸方言の慣用句と文法についての情報が宝の山のように示されている。第二部を完璧に修了した学習者は、日本語の話し言葉

の文法と構造に、もうそれほどひるむ必要はない。(中略)『会話篇』の第三部は日本語の会話文が日本の文字で表記されている。最初の14の会話文はひらがなだけで書かれ、残りはよく使われる漢字が織り交ぜられている。(後略)

また1873年に本国の父からサトウに届いた手紙の「あなたの会話の本(『会話篇』)が大成功だときいて、非常に喜んでいます」(『遠い崖 [11]』35)という書きぶりから『会話篇』に対する評価が大変高かったことが読み取れる。よく売れたということでもある。

さらに、サトウの『アーネスト・サトウ公使日記 [I]』(138)には、『会話篇』刊行から23年後の1896年5月、アーネスト・フォックスウェル(帝国大学法科大学の経済学、理財学の教師)が日本語の教師を紹介してもらうために公使館へサトウを訪ねてきたときも、『会話篇』とチェンバレンの『日本口語文典』とを貸し与えたという記述があり、それによって同書が長きにわたってイギリス公使館で使用され、また流通していたことが裏付けられる。

以上の考察から、『会話篇』はもともとミットフォードをはじめとする公使館員のために編纂されたが、日本語を学習したいと希望する人がいれば教材の原稿を貸し出し、また出版と同時期にジャパン・ウィークリ・メールに書評があげられたこともあって、日本在職・在住の外国人にまで知れ渡るようになり、長く彼らの日本語の学習にも貢献していたことが明らかになった。

いったい如何なるところが『会話篇』を広く長く有力な会話のテキストであり続けさせたのであろうか。結論を先に述べると、①日常生活に必要な「話すこと・聞くこと」の習得を優先した第一部、②独習を助ける教師代わりの第二部を添え、③日本語通訳官兼翻訳官の職務に必要な「書くこと・読むこと」の習得を重視した第三部という作りをしたことにあるものと思われる。この三部構成が極めて独自の価値を『会話篇』に与えているのではないか。以下、その詳細を順次に記していく。

5. 第一部は話すこと・聞くことを優先した話しことばのテキスト

話すこと・聞くことに重点をおいて、それを短時間で効率よく学習させるためのテーマの選び方や非漢字圏という学習者の立場に合わせた表記に工夫がされている。その工夫をテーマから見ていこう。

5-1. テーマの特徴

第一部は、次のようにテーマ毎に分けられた 25 章のローマ字書きの日本語の文章と会話がつづくが、見開きのもう一方のページにはその英訳がある。() 中の番号は章を表す。

(1) 往来、(2) 売買、(3) 先生と生徒、(4) 使用人に起床を命じる、(5) 使用人に命ずる、(6) 求める・尋ねる、(7) 言う・語る(話す)など、(8) 言う・語るなど(丁寧な言い方)、(9) 言う・語るなど(さまざまなフレーズ)、(10) 見る・知る・理解する・間違い・意見など、(11) 路上で、(12) 火事、(13) 新しい使用人と契約する、(14) 使用人が暇を求める・さまざまな理由で使用人を解雇する、(15) 日本の正月、(16) 恵方参り、(17) 公務の旅行、(18) 個人の旅行、(19) 個人の旅行(つづき)、(20) 漢字の学習、(21) 条約違反についての外国領事と日本人役人の問答、(22) 季節、(23) 天気・風・雨、(24) にわか雨・雷雨・霧・氷結・雪・みぞれ・ひょう・露、(25) 紹介・訪問・贈答

これらのテーマを一見して、第一に言えるのは実用性に富む話題が提供されているということである。とくに(1)から(11)までのテーマには生活に必要な最も基本的な使用語彙と理解語彙が含まれており、学習の成果がそのまま実生活に結びつくように工夫されている。

第二が、学習者の最大の関心事がテーマとなっていることである。それが使用人をめぐる(4)(5)(13)(14)の話題である。当時、神奈川の外国人の居留地には大勢の日本人が雇われていて、かれらの助けなしでは私生活が成り立たないほどであっただけに、使用人をめぐるテーマは学習意欲を高めたであろう。じつは、『回想録〔下〕』(80)には、サトウが一軒の家を借りて4人の使用人を雇っている記述があり、これらのテーマは彼の実生活からのものと考えられる。雇った4人のうちの一人は家のすべての管理や勘定の支払い、必要な修繕の手配、直接サトウに会う必要のない用事で来る人々との応接を担当する人、その次は食卓に侍したり小間遣いとして立ち働く14歳の少年、それから床を掃除したり、朝晩の雨戸の開閉、それに衣類のボタンを縫いつけたりする30歳ばかりの雑用係の女、最後は門番で、庭の掃除、馬の世話などをやる男である。近所の使い歩きや家族全体のための飯炊き、そのほかの万端の雑用に役立つような男1人も雇うつもりだったようである。また同書の別の頁では、雇った給仕や使用人に買い物の値段を上乗せされたり、嘘をつかれたり、逃げられたりして手を焼いていた証言もある(『回想録〔上〕』67; 91-92)。

第三が、(12)と(21)といった当時の時事問題を扱っていることである。(12)

の火事の話は 1862 年に発生した横浜大火がモデルと考えられる。『回想録〔上〕』(200-204)には 4 頁にわたる横浜大火についての記述がある。そして(21)の条約違反についての外国領事と日本人役人の問答の話題も、契約の破棄や詐欺が決して珍しいことではなかった当時の状況をモデルにしたと思われる(『回想録〔上〕』20)。

第四が、日本語を学びながら追体験できる話題が提供されていることである。(17) から (19) までの旅の話題であるが、これらには幕末のころの東海道の宿場の様子がリアルに描写されていて、学習者の興味を誘発させて知的好奇心を刺激したものと思われる。サトウは公務の旅行では南は鹿児島から北は北海道まで、個人の旅行では熱海、箱根、王子、浅草、八王子や高尾山まで足を延ばしている¹³⁾。

第五が、日本人の生活習慣を垣間見ることができることである。その例が(11)(15)(16)(25)である。このような話題には季節・時効の挨拶、安否・辞去の挨拶といった慣用表現や社交辞令の言葉が含まれるため、日本の風土・風習・習慣に精通していないと会話に参加することが困難である。天候に関する挨拶やお正月のやり取りといった日本人の生活習慣に関わる話題は、対人関係において欠くことができないだけに現代でも有効な事例とみなされる。

第六が、日本の気候を取り上げていることである。(22) から (24) までのテーマで、春の陽気、夏の暑さ、秋の涼しさ、冬の寒さ、風、雨、雷雨、雪などについて会話するときの例文をあげている。それを 4 例ほど次に引用してみる。引用文の原文はローマ字表記であるが平仮名で翻字をしている。すべての平仮名は現代仮名遣いである。右の数字 (EX22-9) は、例文の所在 (EXERCISE22 編 9 番) を表す (以下同様)。

- (1) ああ、のどか な ひ だ。(EX22-9)
- (2) ひどい あつさ で こまります。(EX22-25)
- (3) めっきり と すずしく になりました。(EX22-43)
- (4) ゆび が かじかんで ふで が もてません。(EX22-57)

日本の気候が目の前に蘇るように描かれていて学習者の性別や年齢を問わず楽しめるテーマである。

第七が、全 25 章中、22 章が日本人同士の会話という設定をしていることである。外国人と日本人の会話という設定は、(3) 先生と生徒、(20) 漢字の学習、(21) 条約違反についての外国領事と日本人役人の問答の三つの章だけである。

しかも、(3) (20) (21) の会話でも難しい表現は日本人が話すといった現行の教材にみられる配慮はあまりされていない。それには、母語で考え、耳に聞こえてくる日本語を一々母語で逐語訳して理解するといった外国人特有の日本語に終始することなく、学習者をはじめから日本人の視点に立つようにして自然な日本語を身に付けさせようとした考えがあったのではないだろうか。

以上の七つの特徴をとおして、テーマにおいては学習の成果がそのまま実生活に結びつく実用性のみならず、学習者の興味を誘発して学習意欲を持続させるための内容展開がなされていたことが指摘できる。そして、その会話が日本人同士の会話という設定で、学習者を初めから日本人の視点に立たせるようにしていることも注目される。では、もう一つの注目点、ローマ字書きについて考えてみよう。

5-2. ローマ字書きの背景

第一部は実用的かつ学習者の知的好奇心を刺激する楽しい会話をローマ字書きの文章で提供している。ローマ字書きの背景には非漢字圏の外国人の日本語の研究や学習を妨げる漢字がある。漢字が書けない、漢字が読めないというハンデである。オールコックの『大君の都 [上]』(265-266)には、漢字を含む書きことば学習の難しさが述べられている。

ひとたび書きことばに目を転じると、山ほどの困難がある。書き方には、三つの様式がある。第一の方法は、中国文字を使用し、第二と第三は、それぞれ片仮名と平仮名として知られている二つのアルファベットを用いる。だが、これだけでは、この問題にちょっと足をふみいれただけにすぎぬ。ヨーロッパ人の学者にとって不幸なことに、日本人は中国文字を書くのにとくさんの異なった方法をもっており、さらにいっそう困ったことには、そういう異なった方法のすべてを同一のページにまぜる習慣がある。このように、まず中国文字、あるいはむしろそれにもっとも近いものからはじめるとすると、四角な文字を書くのさえ、三通りの方法があるのである。第一が楷書(「楷」とは「注意」という意味)といわれるもので、普通には詩や印刷本にだけ用いられる。第二は行書(「行」とは「行動」ないし「外に出ること」という意味)で、公けの書簡や公文書用の型である。第三は草書(「草」は「草」ないし「草木」という意味)で、同格の人同士の打ちとけた通信に用いられる。

このように書きことば学習が困難を伴うため、サトウは日本語の読み書きが不十分な来日したばかりの公使館員、あるいは必ずしも書きことば習得が必要でない外国人に仮名・漢字の学習と会話の勉強を両立させるよりも、はじめのうちは馴染みやすいローマ字をもって日本語の発音を写し、まずこちらの生活に必要な会話の習得に専念させた方がよいと考え、第一部をローマ字書きにしたものと思われる。

以上の考察から、第一部は非漢字圏の学習者が短時間で日本での日常生活に必要な会話（口語）が習得できるように、実用的かつ学習者の知的好奇心を刺激する楽しい会話をローマ字で提示し、日本語の基礎知識のない人でも気軽に日本語の勉強がはじめられるように教材づくりが行われていたことがわかる。では、第二部の検証に移ることにする。

6. 第二部は独習を助ける教師代わりの1冊

第二部は、第一部の第1章から第25章の日本語中に出てくる語句を取り上げ、その意味・用法について英語で説明を加えている。その具体例として、「-下さい」(EX2-20)と「-なすっちゃ」(EX2-44)についての注解をあげる。引用する注解は櫻井(2009)による日本語の訳文である。

-下さい;「下さる」の命令法「下され」のこと。「下さる」は to cause to come down (下へおろさせる), to give from a superior to an inferior (目上の人から目下の者へ与える)の意で、丁寧の補助動詞すなわち to condescend to do(身を落として…する)の意としてもよく用いられる。「下さる」は大抵、「下される」と間違われて用いられるが、「下される」は「下さす」to hand downの可能法で、敬語の意味合いに用いられる。この語は「なさる」と同じように活用する。これの分詞やそれに類似した語形における二番目の「a」の母音はしばしば省略され、「くださって」「くださった」と同じように「くだすって (kudas'tté)」「くだすった (kudas'tta)」が用いられる。(後略)

筆者の経験からして、日本語を学習するための辞典や文法書が出揃い、またインターネットでも検索可能な今日でさえも「-下さい」についてのこれだけの知識を得るには相当な時間と忍耐が要求される。とくに、次にあげる「-なすっちゃ」のような話しことばの短縮形は理解に苦しむものであった。

「なすっちゃ (nas'tcha), 「なすっては (nas'tté wa)」のことで、ここでは買い手がもう少しお金を出すことを想定しているが、その想定は現実のものではない。You having given a little more, how would that be? (もう少しお金をお出しただいてはいかがでしょう?)の意。「なすったら」(nas'ttara) if you were to という条件法過去形でも代用できる。

サトウの「-下さい」と「-なすっちゃ」の注解には、初級から上級までの学習者が求めている説明が網羅されている。それによって、学習者の疑問は即決され、中断することなく勉強を続けられたであろう。そして、この第二部には、丁寧語の使い方 (EX1-1) や人称代名詞 (EX6-22) や接頭語「お」や「ご」(EX1-5) についても詳しい解説を施している。また、親族関係表 (EX5-26) や「ある」と「ない」の語形変化 (EX1-14) も示し、巻末には「くる」の現在・過去・未来の肯定形と否定形を含む 26 種類の活用形や 25 種類の「ます」についての活用形も表形式で載せている。

幕末のころにこれほどの注解集を添えた日本語の教材が書かれていたことは大変興味深い。しかし、その一方で、書くしかなかったのでは、という思いもするのである。それは次の 3 点による。

第一に、『会話篇』の会話が指導者なしでは勉強しにくいという点である。本稿の 5-1 の「第七に」においても述べたように、コミュニケーションの自然な流れを重視した日本人同士の会話であるために難しい表現が多く、また一カ所にいろいろな文法項目が盛り込まれている。基礎から積み上げていった学習者でなかっただけに、難しい表現や文法項目についての注解を用意する必要があったと考える。

第二に、独習が基本であったということである。教育機関や教師への依存度が低くなればなるほど教材の充実が求められることから、同様の学習環境に置かれていた学習者を手助けするために初級者から上級者までの学習者が求めている説明を提示し、学習を中断することなく続けられるように教材づくりをしたと考えられる。

第三に、サトウ自身の職務上、効率を上げるためであったという点である。短時間で一人前の通訳官兼翻訳官に育てあげて公使館の仕事に就かせるとともに、彼らの中の何人かは長崎・神戸・北海道といった条約港に設置された領事館に送ることが求められていたようである¹⁴⁾。そのために効率的な教育が必要であって、効率を上げるためには補助教材ともいべき第二部を作る必然性があったのである。

以上で見てきたように、当時の学習者にとっての第二部は今のインターネット検索と同じく、ページをめくるたびに日本語に関する何らかの知見が得られるようになってきているのである。しかも、それらは英語で書かれているため、とくに英語母語話者の学習者には願ってもないものであったに違いない。短時間で効率的な学習を必要とした当時の日本語学習の大きな手助けとなったことであろう。

それでは、本稿の最後の論点である第三部の分析に移りたいが、じつは、第三部は日本語教育の分野はむろんのこと、日本語学の観点から取り上げた先行研究においてもまったく顧みられずにいた。しかし、ほんとうに見過ごしてよいものであろうか。次節でその答えを提示する。

7. 第三部は日本語書記官の育成のための書きことばの教材

第三部は、第一部のローマ字表記の日本語の対話文を、手書きで仮名文および漢字仮名交じり文に直したものである。具体的には、第1章から第14章までは仮名文にあらためられ、第15章から第25章までは漢字仮名交じり文となっている。仮名は、感動詞のようなごく一部の語にはカタカナを交えるが、大部分は平仮名で、その平仮名ははじめは普通の字体のものを扱い、のちに、いろいろな変体仮名（第4章と第15章）も用いられている。漢字には平仮名による振り仮名を添え、草書体（第15章以降）も混用されている。その冒頭には「平仮名並片仮名」と題して、いろは順による仮名表を載せている。

この構成からは、話しことば教育から書きことば教育へのプロセスが綿密に計算されていることが見てとれる。とくに、学習困難と思われる種々の変体仮名や草書体の漢字を導入している点は注目したいところである。これらはその知識を必要とする分野ならともかく、一般の外国人には必ずしも必要な学習事項ではないからである。そこで、和文テキストに込められたサトウの意図を探ることにした。その意図として、次の5点があげられる。

第一に、第三部への書きなおしは著者自身が『会話篇』の序文で「学生には、この言語の発音はどれほど精緻な発音表記法でも完璧に表記することはできないことを忠告しておく。したがって正確な発音を学びたいなら、最初は苦勞するかもしれないが日本語テキストだけで学習することを推奨する。そのためには日本人教師の助けが必要になる」（引用者試訳）と述べているとおり、日本語（和文）のテキストで正確な発音を学ばせるためであった。

サトウが発音にこだわるのは正確な発音と自然な日本語の駆使は通訳官の武

器となるためであろう。『回想録〔上〕』（194）には、その状況を記した箇所がある。

私は、日本語を正確に話せる外国人として、日本人の間に知られはじめていた。知友の範囲も急に広がった。自分の国に対する外国の政策を知るため、また単に好奇心のために、人々がよく江戸から話をしにやってくる。（中略）訪問者の多くは、大名の家来だった。

日本語を正確に話せたからこそ、のちの日本をリードする立場にあった人々と友好関係を結ぶことができ、外交に役立つ情報を入手することができた。そのことが、「われわれイギリス人は、これらの競争国よりもいっそう注意深く日本国民の脈をとって、政治上の容態をよく診断していたので、1868年、1869年におけるイギリス公使の威信は全く素晴らしかった」という外交の勝利に繋がった（同上、p.216）。

第二に、第1章から第14章までを仮名文に改めたのは、通訳の研修生に普通の字体のひらがなやカタカナの知識を十分に身に付けさせるためであった。ひらがなやカタカナの習得は日本の役人から提出される日本語の文書を正確に理解するためにも、またイギリス公使館から日本の役人に提出される英文文書の日本語訳を正しく書くためにも必要不可欠な学習項目であったはずである。ちなみに、当時は手書きが主流だったため、かれらの日本語の正書法や翻訳文に書いた漢字の正しい書き方も昇進試験のチェックポイントだったようである¹⁵⁾。

第三に、第4章と第15章に種々の変体仮名を導入しているのは、くずし字を含む日本人が書きたいいくつかの手書きの文体を通訳の研修生に教えるためであった。本稿の42のパークス宛の報告書にも記されていたように彼らを教えるために日本人の書家を雇っていた。また、サトウ自身も3度も流儀を変えながら日本人の書家を雇って勉強していたことや眼病にかかった書道の教師のエピソードを記している（『回想録〔上〕』69）。日本側から送られてくる公文書が手書きだったので、それを読解するための変体仮名の知識は翻訳官の重要なスキルであった。

第四に、漢字仮名交じり文に書き直した主な理由は、書きことばを学習させて公文書の読解力を身に付けさせるためであった。とくに、読解力のためには漢字の学習が必要不可欠であった。宣教師ブラウンが本国に送った手紙には、読解力のための漢字の必要性和重要性についての記述がある¹⁶⁾。

漢字の知識は、日本の書物を読むのに必要なのです。というのは、漢字は日本語つづりの中に多く入り混じっているので、和漢の二つの知識が無かったら、この国の大部分の文学を理解することはできないくらいです。それで日本語の研究は二重に困難なのです。

このような事情から、漢字教育がイギリス公使館の最大の課題であった。オールコックの『大君の都〔上〕』(270)には、漢字の重要性と通訳見習に対する漢字教育についての記述がある。

われわれの通訳見習いが、中国文学と中国の文語をあらかじめ知っておかないで日本文字の書き方を習得しようとするのはひじょうに損なことが明らかになったので、(中略)こんごははじめの二年間は中国にとどまって、まず中国語から学びはじめるべきだと説いた、ということである。こうすれば、最初のうちは日本語の文語と口語の特別な知識を習得する時間が失われるかも知れないが、ひとたび中国語を学ぶという過程をへて日本人のあいだで一般に使用されている中国文字のいろいろな組み合わせをすぐ読みこなす力をえて日本に着いたならば、かれらの進歩は確実かつ急速なものとなるから、失われた時間は十分に補われるはずだ。

本国の日本担当者に日本語学習における漢字と中国語の重要性を説明した箇所である。そして、この記述からは漢字や中国語が日本語を学習するための媒介語であったことも読み取れる。オールコックの力説の背景には、当時の外交官の重要な職務は公文書の翻訳であったために、漢字に対する知識なくして翻訳官の業務の遂行は不可能だという現実がある。『回想録』には、「七、八年の間、ほとんど毎日公文書の翻訳をやってきた」とか、「ハリー卿は私にたくさん政治上の文書を渡し、これらを翻訳するように命じた」とか、「政治の大きな変動に伴って、いろいろ政府の人々と会談するハリー卿の通訳をつとめたり、公文書を日本語から翻訳したり、日本語に訳したりする仕事が山のように私にかかってきていた」といった翻訳に関する記述がよく見受けられる¹⁷⁾。

最後に、漢字に草書も盛り込んでいるのは、書簡文の読解に必要な不可欠な知識だからであった。サトウも教師の高岡要から書簡文とともに書体を学び、さらに書道にも足を踏み入れて、草書や楷書も学んでいる。じつは、翻訳官としてのサトウの日本語の読解力が公式に試された最初の機会は、将軍の閣老の一人から届いた書面であった(『回想録〔上〕』70)。その閣老の一人とは小笠原

図書頭であり、書面の内容は諸港を閉鎖して外国人をことごとく国外に追放せよという大君の命令であった(同上、pp.99-103)。

以上の五つの考察から、第三部は正しい発音で正確な日本語を話すことができ、しかも精度の高い読解力と丁寧な筆致による翻訳文を作り上げられる外交官を育成するための教材であったといえよう。したがって、第三部は日常会話の習得を目的とする一般の外国人には向かない反面、一流の日本語書記官を目指す公使館員にとってはなくてはならない1冊であり、『会話篇』が長くイギリス公使館で使われ続けるテキストとなった一因と考える。

8. おわりに

『会話篇』の教材としての側面について、幕末の日本語学習の環境や編纂の理由、利用状況、出版後の反響を概観するとともに、第一部での学習目標、第二部を作成した背景、第三部での学習目標を検証し、その評価と位置付けを試みた。以下に要点をまとめておきたい。

幕末のころは日本語を専門に教育する機関や教授の素養を持った教師はおらず、とくに英語母語話者の日本語学習に必要な適切な教材もなかった。サトウは自身の学習がゼロからの出発だったため、後進の業務や自身の教育係としての職務のために『会話篇』という教材づくりに入った。

『会話篇』はもともとミットフォードをはじめとする公使館員のために編纂されたが、日本語を学習したいと希望する人がいれば教材の原稿を貸し出し、また出版と同時期にジャパン・ウィークリ・メールに書評があげられたこともあって、日本在職・在住の外国人にまで知れ渡るようになり、長く彼らの日本語の学習に貢献していた。

『会話篇』が長く広く学習者の支持を受けた理由として、①日常生活に必要な話しことばの習得を優先した第一部、②初級から上級者までの学習者の疑問に答える第二部を添え、③日本語書記官の職務に必要な書きことばの習得を重視した第三部という構成をとった点がある。各部の要点と評価すべきところを簡略に述べると、まず第一部は、テーマ毎に分けられた25章のローマ字書きの日本語の文章と会話がつづく。各章のテーマの選び方が実用性に富み、生活に即した使用人をめぐる話題や旅行といった学習者の興味を誘発して学習意欲を持続させるための内容展開がなされていることが注目される。また、テーマの全25章のうちの22章が日本人同士の会話という設定で、学習者を初めから日本人の視点に立たせるようにしていることも評価されるべきであろう。さら

に、会話がローマ字で書かれているため、非漢字圏の外国人には親しみやすく、仮名や漢字の知識のない人でも気軽に会話の勉強が始められるように作られていることも注目に値するものと思われる。

第二部は、第一部の第1章から第25章の日本語中に出てくる語句を取り上げ、その意味・用法について英語で説明を加えている。この補助教材は、①『会話篇』の会話が日本人同士という設定なので難しい表現が多く、また一カ所にいろいろな文法項目がもりこまれていること、②独習が基本であるため、疑問や問題解決に学習が中断されやすいこと、③通訳の研修生たちは最短期間で集中的に日本語の力を身に付けることが求められていることの事情において必然的なものであったと考える。

第三部は、第一部のローマ字表記の日本語の対話文を手書きで仮名文および漢字仮名交じりに書き直したものである。その背景には、①和文から正確な発音と自然な日本語学ばせること、②第1章から第14章までを手書きの仮名文にあらためて通訳の研修生に普通の字体のひらがなやカタカナの知識を身に付けさせること、③第4章と第15章に種々の変体仮名を導入して、くずし字を含む日本人が書いたいくつかの手書きの文体を通訳の研修生に教えること、④漢字に草書を盛り込んで書簡文の読解に必要な不可欠な知識をつける、という四つの学習目標があった。したがって、第三部は正しい発音で正確な日本語が話せることができ、しかも精度の高い読解力と丁寧な筆致による翻訳文を作り上げられる外交官を育成するための1冊であったといえよう。

総じて、『会話篇』が独力と手さぐりで日本語習得に精進した外国人の日本語学習に果たした役割は大変大きいと考える。チェンバレンにして「どうも！日本のことばは、大変に入り組んだもので、どうも！腰の曲がるまでも、しょせん覚え尽くしますまい」¹⁸⁾という例文まで作らせるほどの複雑な日本語を、どうすれば話せるようになるのか、と苦心する学習者の大きな手助けとなった画期的な「日本語学習書」であると評したい。

注

- 1) アーネスト・サトウの『会話篇』(1873)について、吉田(1952: 336)「先づ明治初期の東京語の面影を知るためには、英人アーネスト・サトー氏(Ernest Satow)の著した「会話篇」(Kuaiwa Hen, twentyfive exercises in the Yedo colloquial, for the use of students. 明治六年版)の如き書によるべきであらう」と述べている。
- 2) 小松(2006: 302)は「会話篇が幕末江戸語の資料として優れていることは、今

更ここで云々するまでもないだろう。特に武家言葉資料として、抜群の高い資料性を備えている」と指摘している。

- 3) 小島俊夫 (1972) 「会話篇 (E.Satow) にあられた江戸ことば」(『国語国文』41 {5}), 古田東朔 (1974) 「幕末期の武士のことば」(『国語と国文学』51 {1}), 飛田良文 (1977) 「英米人の習得した江戸語の性格」(『国語学』108)、小松寿雄 (2006) 「会話篇に見る幕末の江戸語—音節融合を中心に—」(『近代語研究』13) などを参照した。
- 4) 坂田精一訳『一外交官の見た明治維新 [上・下]』アーネスト・サトウ著、岩波書店、1960、(本稿では『回想録 [上・下]』と呼ぶ)
- 5) ここに記した安政五カ国条約やイギリス公使館およびオールコックについては、『日本史大事典』(平凡社：1992)と『日本歴史大辞典』(河出書房新社：1974)を参照した。
- 6) オランダ語の使用については『回想録 [上]』(21)を参照した。
- 7) 『会話篇』を編纂した理由については楠家 (2009 : 213-220) に負うところが大きい。
- 8) サトウの生涯については『近代文学研究叢書 [31]』昭和女子大学近代文学研究室、1969年に詳しい。
- 9) 上記のサトウの昇進については『回想録 [上]』(174;195)と荻原延壽『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄 [14]』(2001 : 330)を参照した。
- 10) このミットフォード (1837 ~ 1916) は1855年オックスフォード大学クライストチャーチに進学して58年に卒業後、すぐ外務省入りを果たす。1865年には北京の英国公使館の勤務を自ら志願し、北京の代理公使であった中国語に堪能なサ・トーマス・ウェイド (後のケンブリッジ大学の中国語教授) について中国語を猛勉強する。翌1866年に日本へ転勤を命ぜられ、1870年1月まで約三年余り日本に勤務することになる。在任中、ミットフォードはサトウの能力と知識を認める上司であり、オランダ語専門家が牛耳を取っていた公使館の通訳・翻訳・教育制度を英語から日本語、日本語から英語へのシステムに変えようと努力するサトウのよき理解者であり、協力者であり、親友であった。ミットフォードについては、長岡洋三訳『Memories』『英国外交官の見た幕末維新リーズデイル卿回想録』(A.B.ミットフォード著、講談社、1998 : 264-267 : 34)を参照した。
- 11) 「序文」『会話篇』東洋文庫 (1967 : Ⅲ ~ Ⅳ) と『回想録 [上]』(1960 : 249)を参照した。
- 12) 英国国立公文書館所蔵の外務省文書 (FO : Records created and inherited by the Foreign Office) 「R.68 : F.O.46/Vol.116-117 (1869) pp.63-65」(Microform)
- 13) サトウの公用私用の旅については『回想録 [上]』(79-80;198;246)を参照した。
- 14) 市川慎一他訳『オーストリア外交官の明治維新一世界周遊記〈日本篇〉』(アレクサンダー・F.V.ヒューブナー著、新人物往来社、1988 : 138)を参照した。

- 15) 昇進試験については楠家 (2005) 『W.G. アストン—日本と朝鮮を結ぶ学者外交官—』 (雄松堂、180-185) を参照されたい。
- 16) 高谷道男編訳『S.R. ブラウン書簡集』日本基督教団出版局、1965 : 48-49
- 17) 公文書の翻訳については『一外交官の見た明治維新〔上〕』(69:195) と同書〔下〕(pp.80-81) を参照した。
- 18) 引用文の原文はローマ字表記であるが平仮名と漢字で翻字をしている。すべての平仮名は現代仮名遣いである。原文は大久保恵子編訳「会話断章 32」『チェンバレン日本語口語入門』(笠間書院、1999 : 600) である。

参考文献

- 飯田晴巳 (2002) 『明治を生きる群像 近代日本語の成立』 おうふう
- 石井光治 (1957) 「薩道著『会話篇』」『神戸外大論叢』 8 (1)
- 大久保恵子 (1988) 「明治初年における Adjective 考—E. サトウ「会話篇」を中心として—」『お茶の水女子大学日本文化研究年報』 12 : 119-132
- 大久保恵子 (1999) 『チェンバレン日本語口語入門』 笠間書院
- 金沢朱美 (2008) 「アーネスト・サトウと日本語研究—『会話篇』を中心に—」『目白大学人文学研究』 4 : 171-181
- 金田弘・宮腰賢 (1994) 『新訂国語史要説』 秀英出版
- 楠家重敏 (2005) 『W.G. アストン—日本と朝鮮を結ぶ学者外交官—』 雄松堂
- 楠家重敏 (2009) 『アーネスト・サトウの読書ノート—イギリス外交官の見た明治維新の舞台裏—』 雄松堂
- 黒崎佐仁子 (2011) 「役割語から考える自称詞『わし』の方言性と出現時期」『聖学院大学論叢』 23 (2) : 1-14
- 小島俊夫 (1972) 「会話篇 (E.Satow) にあらわれた江戸ことば」『国語国文』 41 (5) : 41-53
- 小松寿雄 (2006) 「会話篇に見る幕末の江戸語—音節融合を中心に—」『近代語研究』 13 : 301-315
- 坂田精一訳 (1960) 『一外交官の見た明治維新〔上・下〕』 アーネスト・サトウ著、岩波書店
- 櫻井豪人 (2009) 「アーネスト・サトウ『会話篇』Part2 訳注稿」茨城大学人文学部紀要、人文コミュニケーション学科論集 (7) : 1-20
- 芝野六助訳補 (1908) 『日本文学史』 W.G. アストン著、大日本図書 : 原本序一
- 庄田元男訳 (1999) 『アーネスト・サトウ伝』 B.M. アレン著、平凡社
- 常盤智子 (2001) 「E.M. サトウ『会話篇』にみられる音節『エ』の表記原理—表記と音韻・音価の関わりをめぐって—」『国語と国文学』 78 (6) : 41-53
- 常盤智子 (2003) 「ケンブリッジ大学図書館蔵 アーネスト・サトウ直筆資料について—『日本語会話練習帳』と『会話篇』との比較および翻字—」『千葉大学日本

- 文化論叢』4：49-59
- 長岡洋三他訳（1989）『アーネスト・サトウ公使日記〔I〕』アーネスト・サトウ著、
新人物往来社
- 長岡洋三訳（1998）『Memories』『英国外交官の見た幕末維新リーズデイル卿回想録』
A.B ミットフォード著、講談社
- 萩原延壽（1998）『青い崖』（全14巻）、朝日新聞社
- 飛田良文（1977）「英米人の習得した江戸語の性格」『国語学』108：77-96
- 古田東朔（1974）「幕末期の武士のことば」『国語と国文学』51（1）：1-13
- 松村明（1970）『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂
- 松村明（1998）『増補江戸語東京語の研究』東京堂：351-419
- 兪三善（2015）「アーネスト・サトウ『会話篇』における言いさし表現について」『實
踐國文学』88号（左1）：1-24
- 吉岡英幸・本田博之（2016）『日本語教材研究の視点—新しい教材研究論の確立を目
指して』くろしお出版
- 吉田澄夫（1952）「東京語の特色」『近世語と近世文学』東洋館：331-342
- 山口光朔訳（1962）『大君の都—幕末日本滞在記〔上・中・下〕—』オールコック著、
岩波書店
- 『日本史大事典』平凡社、1992
- 『日本歴史大辞典』河出書房新社、1974
- 『会話篇』（Part I・II）東洋文庫、1967
- 『春秋雑誌 会話篇』（全2冊）（『増補 江戸語東京語の研究』東京堂、1998に所収）：
423-522
- 『THE JAPAN WEEKLY MAIL』（復刻版）、第一期第一回配本（1870-1874）、2005

（ゆ さむそん・桐蔭横浜大学非常勤講師）